

## メッセージアウトライン マタイの福音書7：12 「これが律法と預言者です」

[12] 「ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です」

前回マタイ7：7～11節においては「求めなさい。そうすれば与えられます」ということを教えられた。イエスは「父なる神のみこころにかなうことを求めるならば、それは必ず与えられる。探せば見出す。たたけば開かれる」と、熱心にまた執拗に祈り求めることを教えられ、そのように求めれば、「天の父なる神は、ご自分に求める者たちに良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか」と言われた。そしてその良いものとは金銭や物質的なものではなく、信仰者の助け主なる聖霊(御霊)であり(ルカ11：13)、その御霊が結ばせてくださる愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制といった実(ガラテヤ5：22～23)こそ信仰者の霊的成熟に必要な品性であり、そのように霊的に成熟した私たちの生き方を通して神のすばらしさ、神が生きて働いておられること、また神の愛と恵みを世の人々が知るようになるということを教えられた。

12節冒頭の「ですから」という言葉はすぐ前の7～11節と関係があるとは一見考えにくいですが、しかし7：1～6節からは人をさばいてはいけないという主題で語られており、人の目からちりを取り除くためには、まず自分の目から梁を取り除かなければならないと教えられ、私たちが実際にそのことを実行しようとするときに、どうしても自分自身ではできない限界があることに気づき、神の助け、神の恵みが必要であることにまで導かれなければならなかったのである。そしてそれを受けて神からの良きもの、すなわち父なる神の子とされている私たちの信仰生活を神のみこころにかなったものにするために助け主なる聖霊を熱心に求めることを教えられたのであった。

しかし、この人をさばいてはならないという主題は終わったのではなく、さらに広く、さらに一般的に私たち信仰者がこの世の人間関係においてどのように対人関係を築いてゆくべきかをイエスは教えようとされているのである。そしてこのイエスの言葉は非常に有名で「黄金律(The Golden Rule)」とも言われている。

ユダヤ教のラビ(教師)ヒルレルは「あなたがしてほしくないと思うことは、人にもしてはならない。これが律法であり、後はその説明である」と言った。また多くの哲学者や賢人も同様のことを教えている。しかし、あることをしない、何かをしないということは宗教的な原則というよりは、むしろ法律的な原

則である。これなら信仰のない人、宗教に無関心な人も守ることができる。神の民イスラエルに与えられた「人を殺すな、姦淫するな、盗むな、嘘をつくな、他人の物を欲しがらな」等の戒めは出エジプト記 20 : 13~ 17 の十戒に記されているが、これは自分にもしてほしくないのも他人にもしてほしくないことであり、世の人々も認める普遍的な生活基準でもある。

しかし、イエスは「人からしてほしくないことは……」という消極的、自己保身的な生き方ではなく、「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」と積極的な生き方を教える。

何も言わない、何もしない、何も行動しないということは自分の身の安全にはなるかもしれないがこの世には何の影響力も与えることはないであろう。

別の場面で律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねたことがある。→マタイ 22 : 36~40

「『先生。律法の中でどの戒めが一番重要ですか。』」イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが、重要な第一の戒めです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

最初にイエスが引用されたのは申命記 6 : 5 であり、第二はレビ記 9 : 18, 34 である。

この「律法」とは旧約聖書の最初の五つの書（創、出、レビ、民、申命記）で出エジプトの指導者モーセが神のことばを受けて書いたものであり、「預言者」とはモーセ以後に神が立てられた多くの預言者が書いた預言書のこと。

「律法と預言者」とひとまとめに記されている場合は旧約聖書全体を意味する。この二つの戒めを守り、実行することによって旧約聖書全体で教えられていることを全うすることになるとイエスは言われた。

そして今日の箇所マタイ 7 : 12 の「人からしてもらいたいことは何でもあなたがたも同じように人にしなさい」も「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」と同じことを教えているのであり、これは受け身ではなく、対人関係における積極的な行動をとるよう教える。そしてイエスは「これが律法と預言者です」と断言される。

律法学者やパリサイ人たちやユダヤ人たちは、律法を解釈して数えきれないほどのこまごまとした戒めや規則を作り上げ、それを守ることにきゅうきゅうとしていた。→週に二度の断食(ルカ 18:12)、食事の前に手を洗い、市場から戻ったときは、からだをきよめる。杯、水差し、銅器や寝台を洗いきよめる(マルコ 7:3~ 4)、コルバン(ささげ物)です、と言うなら父や母のために何もしなくてもよい(マルコ 7:10~ 12) 等々。

彼らは律法を忘れて細かい規則、規定、戒めを機械的に守らなければならないものとしてしまったのである。そして、それらを守ることで自分は神の前に正しい者であると思っていた。

しかし、律法の本質、律法の本質は、神を愛し、自分自身のように隣人を愛し、互いに愛し合うということであり、それを実行することなのである。

しかし、言うは易く行うは難しであり、口先ではその通りだ。それを実行しようということは簡単であるが、実際にそれを実践するのが困難なのが私たち人間である。ではなぜそうなのか。それは私たちが神の前に罪人であり、最初に神に造られた人間アダムが神のようになろうとして墮落して以来、神よりも自分中心に生きる道を選び、罪の影響、罪の支配のもとにあるからである。イエス・キリストを自分の救い主と信じるクリスチャンであっても、この地上に生きている限り、罪赦された罪人であり、普通の人々、未信者と同じく神の喜ばれない肉体的生き方をし、自分の目には梁が入っているのに他の人の目のちりを取ろうとするような生き方をしてしまうのである。良いことと分かっているにもかかわらず実行しようとしなのが私たち人間の生来の姿なのである。それゆえ私たちは父なる神に熱心に御霊の助けを求め、みこころにかなった生き方ができるように、そして、人からしてもらいたいことは何でも、同じように人にすることができるように熱心に祈り、求め続ける必要があるのである。自分にしてもらいたいことを同じように他の人にすることは時間や労力、費用が必要なこともある。そしてそれを実行するのに必要な正しい判断力や知恵も祈り求めなければならないであろう。

しかし、それでも私たちはイエス・キリストを自分の救い主と信じ、神の子、天の御国の国籍を与えられている者として、このイエスが教えられた黄金律を実行する者になりたい。

私たちはこのことに関して、良きサマリア人のたとえから学ばなければならない。

→ルカ 10 : 25～37